

会長賞

中学生の部



「一歩踏み出すために」

渋谷教育学園渋谷中学校

1年 藤原 千早さん
ふじわら ちはや

私が「あつくん」と出会ったのはオーストラリアの小学校でした。あつくんはダウン症の日本人の男の子で、私の大切な友だちです。

あつくんが日本からオーストラリアにやって来たのは私たちが三年生の時でした。最初の半年ほどは、私も他のクラスメイトも「あつくんと仲良くしたいけれど、どうしたらいいんだろう。」と困惑していました。障がいがどのようなものか分からなかったから、というのが当時の正直な気持ちだったと思います。

オーストラリアの小学校はひとクラス十人程度の

少人数学級で、おおらかな国柄もありインクルーシブ教育が行われていました。そして、あつくんの介助員として看護師資格を持つ先生の存在もありました。そのおかげか毎日同じ教室で過ごす内に、あつくんの人柄を知り、障がいについての理解が次第に深まっていき、クラスメイトとしてみんな自然に馴染んでいったように私は感じていました。例えば昼ごはんの時にあつくんが

「うまいー」

と言ったことで、

「あのアニメのキャラクターと同じだー」

と教室中が盛り上がり、そこからみんな一気に打ち解けました。また私は、当時チャレンジしていた縄跳びの技ができるようになった時、あつくんが手をたたいて喜んでくれたことで心が温かくなりました。あつくんが自分の名前を書けるようになった時は、私も自分のことのように嬉しく、一緒に喜んだことも良い思い出です。新たに心を開ける友だちが増えたことで、私は学校の居心地がより良くなりました。

一方で、日本に帰国後、日本の小学校の特別支援

学級の有りようがオーストラリアと違っており、違和感を覚えまして。授業の一環で、教室見学に行ったのですが、教室は無人で、生徒同士の交流もありませんでした。結果、見学に行く前よりもより入りづらい所だという雰囲気クラスに広がっていったように感じました。「支援学級の生徒たちもクラスメイトだ。」と実感できるような機会は、私が卒業するまで、一度もありませんでした。このことは、オーストラリアで私が経験してきたインクルーシブなクラスとは異なっていて、今後どうしたらよいのか考えるきっかけになりました。

障がいのあるクラスメイトと一緒に過ごす機会を増やしていくには、介助員もお金も必要で、決して簡単ではないのだろうと中学生になった今は理解しています。オーストラリアでは良い条件が重なって実現できていたのだと思います。しかし、心のハードルを下げることはすぐにできるはずです。健常者とされるクラスメイトの中でも、気の合う人と、そうでない人がいることが普通だと思います。全員と仲良くなることは現実的に難しいです。だからこそ、

友だちとの付き合いにおいて、健常者なのか障害者なのかということは関係なく気が合えば自然に仲良くなれる、という考えを持つことができれば、障がいのある方との思いやりのあるふれあいの実現に向かって一歩踏み出せるのではないかと思います。

私が日本に帰国することになり、あつくんと会えなくなる日、寂しくて悲しくて、あつくんも私も泣いてしまいました。そばにいたお母さんたちも泣いて別れを惜しまました。その時、あつくんのお母さんからこんな言葉をもらいました。

「あつくんに対して、千早ちゃんが普通に接してくれたのが何気につれしいのよ!」

この言葉を聞いて、やっぱりあつくんは友だちなんだとより強く感じられたことが私にとってよい経験になり、中学に入ってからの人間関係においても励みになっています。